

# 藤田嗣治を巡って

2018.11.17 山下 徹

藤田嗣治は戦争協力者であったのか、厭戦的な画家だったのか、論議を呼んでいる。

藤田嗣治は1886年(明治19年)に生まれた。1905年(明治38年)東京美術学校に入学。1913年に渡仏。日本画にあるような輪郭線と乳白色で女性の肌を描き高い評価を得た。1933年に帰国。1938～1939年に従軍画家として中国戦線に従軍。フランスに戻ったが、1940年には帰国。「**陸軍美術協会理事長**」に就任。「ハルハ河畔の戦闘」や「アッツ島の玉砕」を描いた。

戦後、1949年にフランスに渡り、1953年にはフランス国籍を得た。1957年フランス政府からレジオン・ドヌール勲章シュバリエ章を贈られた。1968年逝去。

藤田を巡って「戦後、多くの画家が藤田嗣治をスケープゴートにし、戦争責任を負わせた。それに嫌気が差して、彼はフランスに逃れた。又、アッツ島の玉砕の絵は厭戦的なものだった」との論がある。

## 「アッツ島の玉砕」について

累々と横たわる屍の絵を見て、子を戦地に送った老婆が涙したという話を聞いた事がある。「こんな風に戦わされ、戦死したのか」と嘆く。それをもって厭戦的と云う人がいる。

当時、米兵は圧倒的な火力、砲弾、銃弾、手榴弾、火炎放射器で日本軍の陣地を制圧してから攻め込んだ。

一方、日本兵が米軍の陣地に攻め込もうとしたら、自動小銃、半自動小銃で弾幕を張る。一発ずつ撃つ三八歩兵銃では米軍陣地まで辿り着けない。

ところが「アッツ島の玉砕」の絵ではこうした戦闘の実態は全く描かれていない。反対に、米兵はろくな兵器も持たず、日本兵の刀、銃剣に圧倒されている。

つまり、この絵は厭戦的どころか「米兵の武器は日本兵の武器と互角、ないしは劣っている。米兵恐るるに足らず」と国民を騙し、督戦した絵なのだ。

藤田嗣治「アッツ島の玉砕」



同じ頃、隣のキスカ島を占領した海軍は「勝てない」と撤退。玉砕していない。

描かれた絵がその時代に即したものであるのか、時代考証抜きにした論議はナンセンスだ。

描いた絵の内容、彼が戦時中についた地位を考えると、彼は重大な戦争責任を免れることはできない。

しかし、彼は自らの戦争責任については何も語らずフランスに逃れたのだ。

以上